

2007年 3月31日 第28号



JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：日本手の外科学会

広報委員会

第50回日本手の外科学会の 開催にあたって

第50回日本手の外科学会
会長 荻野利彦
(山形大学整形外科)

目次

- 第50回日本手の外科学会の開催にあたって
- 日本手の外科学会50周年記念式典ならびに記念祝賀会のご案内
- 2006年度 JSSH-ASSH トラベリングフェロー印象記
- 2006年度 JSSH-ASSH Traveling Fellow 印象記
- ハンドギャラリー(児島コレクション)
- 各種委員会報告
- 第6回APFSSH報告
- 用語集改訂について
- お知らせ =学会案内=
- 編集後記

第50回日本手の外科学術集会を2007年4月19日(木曜日)と20日(金曜日)の2日間、山形市において開催させていただきます。本学会が山形で開催されますのは、1991年に渡辺好博名誉教授が会長をされて以来16年振りで、第50回学術集会という記念すべき会を山形で開催させていただきますことを大変光栄に存じております。本学会のテーマは「日手会50周年記念・新たな飛躍」としました。特別な領域のテーマではありませんが、なるべく多くの会員の先生方にご参加いただき新たな飛躍のために何をすべきかなど考えていただければと思っております。

【学会場と事前登録】

学術集会の全てを同一会場で行うために山形国際ホテルを使うことにしました。少し窮屈かもしれませんが、ご不便をかけないで済むと思います。最近の学術集会の手法に習い、複数の会場で講演や発表を同時に行うようにいたしました。また、受付や講演選択での混乱を避けるためにホームページを使って事前に学術集会の参加登録、聴講する講演選択、宿泊の予約をしていただくことにしました。会員の先生方におかれましては、この趣旨をご理解いただきホームページを通じて事前登録をお願いいたします。宿泊も早めにご予約していただければ幸いです。

【プログラム】

学術集会の特別講演は石井清一札幌医大名誉教授をお願いいたしました。外国からお招きした方は23人です。招待講演として11セッションで15名、招待発表として8名の方がお話しをされます。いずれも各国や地域の手の外科のリーダーの先生方です。全ての方が第50回日手会学術集会を盛り上げようということでご自分で参加してください。例年より講演が多いのですが、ランチョンセミナーの時間を旨く使い一般演題の時間が短くならないようにしました。これらの講演は3つの会場を用いて同時進行します。是非、事前登録を早めに行って聴講希望の講演参加チケットを確保してください。第50回学術集会の記念プログラムとしてシンポジウム『次世代へのメッセージ』を企画いたしました。国際手の外科連合のパイオニアとして表彰された先生方と第30回以後の本学会を主催された名誉会員の15名の先生方にシンポジストをお願いいたしました。その他に座長の先生方のご協力で6つのテ

マのシンポジウムを企画いたしました。可能な限り沢山の演題を採用することで応募演題の91%を採用させていただきました。査読をお願いいたしましたプログラム委員の先生方にはこの場を借りましてお礼申し上げます。

【日本手の外科学会50周年記念行事】

50周年記念行事としては、日本手の外科学会主催の50周年記念式典と祝賀会があります。式典は学会場の山形国際ホテルで4月19日午後6時から7時まで、祝賀会はホテルメトロポリタン山形で同じ日の午後7時半からです。全員が参加可能な祝賀会です。参加費は10,000円で着席しての会食になります。同門の先生方や親しい先生方を誘ってご参加ください。祝賀会には事前の参加登録が必要です。多数の先生方のご参加をお願いいたします。ホームページから、あるいは日手会事務局にお申し込みください。

【その他の関連行事など】

学術集会の翌日の4月21日(土曜日)に同じ会場で「国際手の外科シンポジウム・山形」を開催します。世界のトップレベルの先生方のお話を聞き、直接討論の出来る良い機会です。国際学会の雰囲気味わえる小さな国際交流の機会でもあります。先生方のご参加をお待ちしております。

その他の日本手の外科学会春期教育研修会、手の先天異常懇話会、末梢神経を語る会、日本ハンドセラピィ学会、保険診療セミナーも例年通り計画されております。

【山形へのアクセス】

山形に来る交通手段には、(1)東京からの新幹線“つばさ”，(2)山形空港：JALで東京、大阪、札幌、名古屋：小牧、福岡間（大阪乗り継ぎ），(3)仙台空港を経由する方法：仙台空港からは、直行バスに乗るか、空港から電車で仙台駅に行って、仙台で仙山線、あるいはバスに乗り換えて山形までくる方法があります。どの方法がよいかは、出発される場所によりますが、(1)と(2)に比べますと(3)は仙台に着いてからの時間がかかります。ほとんどの情報が以下のホームページを通じてご覧になれます。

仙台空港—山形間バスのホームページ

<http://www.sdj-airport.com/access/page2.html#>

仙台空港—仙台間電車のホームページ（仙台空港アクセス鉄道時刻表(平成19年3月18日以降)）

<http://www.pref.miyagi.jp/rinku/jikoku.html>

仙台駅—山形間のバス、

<http://www.yamakobus.co.jp/jikokuhyou/ya-se.html>

仙山線のホームページ

<http://ekikara.jp/newdata/line/station/1301341.htm>

学会の開催予定の4月末は山形で桜が咲く時期です。山形近郊には蔵王温泉をはじめ多くの温泉もごぞいます。学会と同時に春の山形をお楽しみいただければ幸いです。山形大学整形外科の教室員一同、多くの先生方のご参加をお待ちしております。

〈日本手の外科学会50周年記念式典ならびに記念祝賀会のご案内〉

第50回日本手の外科学会学術集會に参加されます皆様には、謹んでご案内申し上げます。

日本手の外科学会50周年記念式典は平成19年4月19日木曜日、日手会の第1日目の18時より、学術集會第1-2会場（山形国際ホテル）で行われます。来賓、パイオニアをお招きし、日本手の外科学会にふさわしい落ち着いた雰囲気で行いたいと考えております。記念式典にはなるべく学会参加者全員に出席していただきたいと考えておりますので、評議員の方は学会出席者にその旨をお伝えください。その際に、手の外科学会50周年記念小冊子を配布し、学会の沿革を記したブースを第5会場前に展示いたします（戸部委員）。

記念式典の後、近隣にありますメトロポリタン山形に移動していただき、日本手の外科学会50周年記念祝賀会を行います。厳粛に行われます記念式典とは多少趣を変え、山形大学の協力を得まして、音楽やトークを交えた和やかな雰囲気を演出するように、広報委員会は尽力いたします。式典に参加されました会員の皆様は、全員懇親会のつもりで、気軽に参加いただけると幸いです。人数に余裕がございますので、評議員・会員の皆様の登録をぜひともお願いいたします。インターネットでの登録（締め切り3月16日）が苦手な先生方には、3月末日までに事務局にファックスにてご連絡いただければ、当日の受付が可能です。皆様の参加を心よりお待ちしております。

広報委員会 理事 田中 寿一
委員長 青木 光広

2006年度 JSSH-ASSH トラベリングフェロー印象記

北海道大学大学院医学研究科整形外科
岩崎 倫政

2006年度 JSSH-ASSH トラベリングフェローとして釜野雅行先生（石切生喜病院）と私の2名が、米国3ヶ所の施設を訪問する機会を与えていただきました。

9月7-9日まで、Washington DCで開催された ASSH Annual Meeting に参加し、その後約2週間かけて順に New York の Hospital for Special Surgery (HSS), Rochester の Mayo Clinic, Boston の Massachusetts General Hospital (MGH) の3ヶ所を訪問しました。この3施設は、U.S. News 誌が毎年発表する全米の整形外科トップ3に毎年選出される施設であり、本年は Mayo Clinic, HSS, MGH の順でした。私自身、手の外科を見学するという目的とともに米国の超一流の整形外科医療機関のシステムやそこで行われている研究はどのようなものかを実際に見てみたいという希望もありました。HSS では Dr. Scott W. Wolfe, Mayo Clinic では Dr. Allen T. Bishop, MGH では Dr. Jesse B. Jupiter がホスト Dr. として、我々を受け入れてくれました。HSS では整形外科全体として1日平均80件（入院50, 外来30）、週400件の手術をこなす病院全体としてのシステムと、fellow に対するスタッフ Dr. のマンツーマンの指導体制に強い感銘を受けました。次の訪問先の Mayo Clinic では、主に腕神経叢損傷に対する手術およびこれに対する特殊外来を見学しました。まさしく、世界中から腕神経叢損傷患者が集まっているという印象を受けました。最後の MGH は、Harvard 大学の関連病院ということもあり、他の2施設以上にアカデミックな印象を受けました。Dr. Jupiter の手術を主に見学しましたが、MGH の整形外科医3名で設立したプライベート病院に患者を連れて行き、キーンバック病に対

する橈骨骨切り術をはじめとして7件の手術をこなしている（しかもブラジルから帰国直後）姿は年齢を全く感じさせないものがありました。ある fellow は、彼は70歳までは今の役割（hand section の chief）をこなすだろうとこっそり教えてくれました。

各訪問先では非常に暖かい歓迎を受け、アフター5も十分に楽しむことが出来ました。また、若い fellow や resident の医学に対する真摯な態度、スタッフ Dr. の熱意あふれる指導に強い感銘を受けました。最後に、有意義な訪問の機会を与えてくださった日本手の外科学会、特に国際委員会の諸先生、貴重な時間を割いて訪問中のお世話をしてくださった田口先生（熊本機能病院）、山本先生（京大）、さらに快く送り出してくださった三浪明男教授以下、教室の先生方にこの場を借りて深謝いたします。



HSSにて Dr. Wolfe（左から3番目）と

2006年度 JSSH-ASSH Traveling Fellow 印象記

石切生喜病院整形外科
釜野雅行

2006年度の traveling fellow としアメリカに行って参りましたのでそのご報告をさせていただきます。

1) Hospital For Special Surgery (New York)

現在の hand chief は Dr. Wolfe で数年前に ASSH 側のフェローとして訪日されておられます。初日は Dr. Hotchkiss の RA 肘に対する鏡視下滑膜切除術と外傷性拘縮肘に対する拘縮解除術を見学しました。翌日はバイオメカのラボを見学後、lunch conference で presentation を行いました。午後からは Dr. Hotchkiss の外来診察を見学しました。

2) Mayo Clinic (Rochester)

現在の hand chief は Dr. Bishop です。初日は バイオメカラボ、軟骨のラボを訪問し、それぞれの研究者から update な研究についての lecture を受けました。午後からは外来診察を見学しました。その日の外来は腕神経叢損傷患者が多く、イラク戦争で負傷したアメリカ兵士も診察に来ていました。翌日は朝6時半からの hand conference に参加したあと手術を見学しました。腕神経叢麻痺に対する土井法、中手骨に発生した Aneurysmal bone cyst の切除術を見学しました。

3) Massachusetts General Hospital (Boston)

Harvard medical school の教育病院でもある MGH では Dr. Jupiter, Dr. Ring, Dr. Lee が上肢の治療にあたっています。初日はバイオメカのラボを見学しました。二日目は Dr. Lee の手術を見学しました。訪問三日目は午前7時から Dr. Jupiter の講演を聴いた後、手術を見学しました。キーンベック氏病 stage IIIb に対する PRC、同じく stage II に対する橈骨骨切り術、他に手根管開放術、ばね指手術や手関節鏡、母指 IP 関節固定術、Dupuytren 拘縮に対する手術を見学しました。いずれの施設も早朝から精力的に仕事を始め、夕方には終えるようなシステム、分業化がすすんでおり、とても合理的でした。

今回のアメリカ訪問では数多くの医師たちと知り合いになることができ、日米両手の外科学会の友好関係確立にわずかながらでも寄与できたのではないかと考えています。各訪問先では予め visiting program が用意されており、とても有意義な時間を過ごすことができました。最後に、この機会を与えて下さった日本手の外科学会理事長、国際委員会の方々、学会の皆様から感謝の意を表します。



Mayo ClinicにてHand Section Staffと

ハンドギャラリー(児島コレクション)IX

埼玉成恵会病院・埼玉手の外科研究所
児島忠雄

芸術作品としての手、その1

多くの画家、彫刻家が手をモチーフとして作品を作りましたが、なかでも、ロダンは非常に沢山の手の彫刻を残しています。

1986年8月、パリのロダン美術館を訪れた際、1983年11月30日から1984年1月9日までRodin, les mains, les chirurgiensと題する美術展が開かれていたことを知り、大変残念に思いました。しかし、幸運にもその美術展のカタログの最後の1冊を手にすることができました(写真左)。この美術展の組織委員会のメンバーには、なんとMerle, Littler, Foucher, Michon, Tubiana, Verdanらのそうそうたる手の外科医が名を連ねていてはいませんか。愛情で結ばれた二つの手などの様々な表情の手とともにRAにより母指CM関節の変形を起こした手、第4中手骨骨折の転位により指のoverlappingを起こした手、尺骨神経麻痺の手など多くの病的状態を表す手が見られます。美術館で製作されたピアニストの手、シークレットのミニチュア(写真上)を求めました。

アールヌーボーのガラス工芸作家としては、ガレ、ドーム兄弟、ラリックが有名ですが、彼らに続くサビノ(1878-1961)の優雅な手(写真右)も展示しています。



各種委員会報告

教育研修委員会

委員長 鈴木 康

平成18年度の教育研修委員会は、担当理事・別府諸兄先生、アドバイザー・田崎憲一先生の下、委員8名（磯貝典孝・稲垣克記・木森研治・坪川直人・中尾悦宏・西川真史・根本孝一、鈴木康）の体制で活動しております。

活動内容は、春期および秋期教育研修会の開催とビデオライブラリー製作です。平成18年4月の第12回春期教育研修会は、当委員会が主体となって企業との共催（今回は三共株式会社）で開催する初めての春期研修会でしたが、第49回日本手の外科学会学術集會会長・浜松医科大学・長野昭教授のご尽力により学術集會の翌日に同会場で行うことができました。続く平成18年9月の秋期教育研修会は、大正富山医薬品株式会社との共催で、東京の大正本社ホールで開催いたしました。しかし、この会の参加者は101名であり、最近特に秋期教育研修会において参加者の減少傾向が顕著となって来ていることから、開催時期や開催回数などを含めて、教育研修会の在り方を根本的に見直す必要があると考えざるを得ません。ただし、平成19年度から実質的に発足する“日本手の外科学会認定手の外科専門医制度”において、当委員会が開催する教育研修会は、専門医資格の認定や更新に必須の条件となる教育研修講演受講単位取得の一手段として重要な役割を果たすと考えられます。従いまして、本研修会への参加者数は今後大きく変動する可能性があり、当分の間は慎重にその推移を見守ることになりそうです。

本年4月21日(土)に開催予定の13回春期教育研修会（共催：万有製薬㈱，会場：学術集會会場内）は、第50回日本手の外科学会学術集會会長・山形大学荻野利彦教授に多大なご支援を賜り、初めての試みとして同学術集會ホームページをお借りした事前参加登録を行っています。このwebでの参加登録方式も参加者の動機付けには有効ではないかと考えます。未だ、申し込みの締め切り前ですが、今回の成果に依っては平成19年9月1日(土)・2日(日)開催予定の秋期教育研修会（共催：小野薬品工業㈱，会場：大阪市・同社本社内）参加登録の際にも、この方式を採用したいと考えております。

当委員会のもう一つの重要課題は、教育研修ビデオの製作です。今までは学術集會での発表演題を教育用ビデオライブラリーに収載する方針でしたが、著作権の問題・プライバシーの問題など高いハードルがあり、作業が停滞しているのが現状です。また、学術集會で発表される演題は通常先進的であり、一般的な教育用として適切か否か、判断に難渋することも少なくありません。このため現在の委員会では、教育用ビデオを学術集會の演題とは別に企画・製作することも考慮しています。しかし、現実には2～5百万円にも上るビデオ製作費が大きな問題となります。委員会では、ビデオライブラリーの充実に向け、現在も鋭意検討を重ねております。

編集委員会

委員長 平田 仁

平成17年度第2回日本手の外科学会編集委員会は第49回日本手の外科学会の会期中に浜松市オークラクトシティホテル浜松において開催された。担当理事が三浪明男から河井秀夫に代わり、井上五郎、加藤博之、瀧川宗一郎、中村俊康、牧裕の5名は18年度も引き続き委員を務めることとなり、新

たに平田 仁が加わった。河井秀夫の担当理事への昇任に伴い、委員の互選により平田 仁が委員長に選出された。

18年度委員会メンバーが確定したところで、論文査読の現状と問題点に関して河井理事より説明があり、改善策について話し合いが持たれた。その結果、査読には全ての評議員が参加する事を原則とし、査読の期限は1ヶ月とし、それを越えて遅延する際にはメール、はがきによる督促を行い、更に遅れる者については査読者変更も考慮する事を申し合わせた。論文の受付については学術集会終了後3週間以内を原則とするが、7月末までに受付を完了したものは学術集会発表論文として取り扱い、8月以降に受け付けたものは自由投稿論文として審査をすることとした。第23巻に対しては第49回学術集会演題数408題に対して論文投稿は207編(50.7%)が寄せられ、第48回(演題数403題、投稿論文数182題、投稿率44.9%)を上回ったが、内訳をみると21題が自由投稿論文であり、そのうち10題は提出期限に間に合わずに自由投稿扱いとなったものであった。自由投稿論文は掲載料が割高となっており、学会発表論文の投稿者には無駄な経済的負担を負うことのないよう提出期限の厳守をお勧めする。

投稿規程に関しては一部の学会員から2重投稿の取り扱いに関して質問が寄せられた。日本手の外科学会ではこれまでに日本手の外科学会雑誌に掲載された論文の外国雑誌への投稿を原則として認めることが申し合わされてきたが、一般的には先に掲載された雑誌に著作権が帰属するため今後外国雑誌からのクレームを受けた際には対応に苦慮する可能性が指摘されたが、この件に関しては委員会メンバーによる協議では結論を出す事ができず、河井理事により理事会に上申された。

雑誌広告に関してはこれまでは専門の業者に委託をしてきたが、第23巻からは編集委員会および事務局において広告募集を実施した。初の試みであり、当初応募が少なく心配されたが、編集委員各位の尽力により最終的には17社からの応募を受け付け、掲載料合計も188万5千円と昨年実績(81万4千8百円)を大きく上回る事ができた。しかし、広告募集の遅れから学会誌発刊が例年より約1ヶ月の遅れを生じ、会員各位にご迷惑をお掛けした事は大変申し訳なく、編集委員会を代表してここにお詫びを申し上げたい。第24巻では例年通りの発刊が可能となるように努める所存であり、皆様のご指導、ご支援をよろしくお願いいたします。

昨年は編集委員会が2回開催されたが、今年度は経費節減を目的に可能な限り電子メール、郵便などで対応をすることとし、平成18年度に入ってからではこれまでのところ編集委員会は開催されていない。平成18年度第1回編集委員会は第50回日本手の外科学会会期中に山形で実施する予定である。

以上のような状況であり、何とか大過なく学会誌の発刊という最も学会にとって重要な事業を進めることができている。これも日ごろからの多くの学会員のご支援の賜物と編集委員会一同感謝をしています。編集委員会としては専門医制度の発足を受け、学会機関紙もこれまでにない新たな役割を担う必要があるのではないかと議論が始まっております。この点に関しても会員の先生方の忌憚のないご意見を頂戴できればと希望しています。益々のご指導、ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

機能評価委員会

委員長 冲 永 修 二

機能評価委員会は現在、藤 哲担当理事のもと、今枝敏彦アドバイザーと6人の委員(内山茂晴、面川庄平、楠瀬浩一、澤泉卓哉、和田卓郎、冲永修二)で構成され、手の外科領域の代表的疾患について、世界的に通用する機能評価法を会員の皆様にご提供することを目的に活動しています。今年度の委員会は4回開催され、以下の活動を行いました。

1 当委員会で開発してきた QOL 評価表の反応性、妥当性の発表

① DASH 日手会版

第49回日手会で「手根管症候群における QOL (CTSI, DASH, SF-36) と理学検査の反応性の比較」を発表, JHS-Asian volume へ掲載しました¹⁾.

前年度掲載された「DASH 日手会版の妥当性の検討」(J Orthop Sci 10 (4): 353-359, 2005) の誤植を J Orthop Sci (Erratum, J Orthop Sci 12 (1): 107, 2007) へ掲載しました.

② QuickDASH 日手会版

第49回日手会と第79回産業衛生学会で「QuickDASH 日手会版の妥当性の検討」を発表, J Orthop Sci へ掲載しました²⁾.

③ 手根管症候群質問表日手会版

第49回日手会で「手根管症候群質問表日手会版の妥当性の検討」を発表, J Orthop Sci へ掲載しました³⁾. 反応性については J Orthop Sci に投稿中です.

2 手の機能評価表の改訂作業

昨年度末に改訂第4版を出版しましたが, 誤植等の不備があり, 会員の皆様には大変ご迷惑をおかけしました. 再度校正作業を行い, 評議員に正誤表を送付させて頂きました.

次版に向けて, 腕神経叢損傷の改訂 (担当: 沖永委員), デュプイトレン拘縮の新設 (担当: 楠瀬委員), 痺性麻痺手の改訂 (担当: 和田委員) が終了, 橈骨遠位端骨折の改訂 (担当: 澤泉委員), 肘部管症候群の新設 (担当: 内山委員), 手関節尺側痛の新設と再接着肢, 手, 指の改訂 (担当: いずれも面川委員) が進行中です.

1) T. Imaeda, H. Hirata, S. Toh, Y. Nakao, J. Nishida, M. Ijichi, A. Nagano for the Impairment Evaluation Committee, Japanese Society for Surgery of the Hand. Comparative responsiveness of Japanese versions of the DASH and SF-36 questionnaires and physical measurement to clinical changes after carpal tunnel release. Hand Surg 11 (1 & 2). 27-33, 2006

2) T. Imaeda, S. Toh, T. Wada, S. Uchiyama, S. Okinaga, K. Kusunose, T. Sawaizumi for the Impairment Evaluation Committee, Japanese Society for Surgery of the Hand: Validation of the Japanese Society for Surgery of the Hand Version of the Quick Disability of the Arm, Shoulder, and Hand (Quick DASH-JSSH) Questionnaire. J Orthop Sci 11 (3): 248-253, 2006

3) T. Imaeda, S. Uchiyama, S. Toh, T. Wada, S. Okinaga, T. Sawaizumi, J. Nishida, K. Kusunose, S. Omokawa for the Clinical Outcomes Committee of the Japanese Orthopaedic Association and Impairment Evaluation Committee of Japanese Society for Surgery of the Hand. Validation of Japanese Society for Surgery of the Hand version of the Carpal Tunnel Syndrome Instrument. J Orthop Sci 12 (1): 14-21, 2007

用語委員会

委員長 岡 義 範

用語委員会は平成16年度から日手会用語集改訂第3版の発刊に向けて実質的な作業に入った.

前委員会における改訂第2版の改定作業終了時, 当時の浜田委員長および山梨大学整形外科のご尽力により全ての用語が Excel に転載記入されたので, この表を基にして改訂第3版に向けた委員会活動が発足した.

改訂作業の骨子は, 改訂第2版の誤訳・誤植・訂正を要する用語の修正, 新たに収載を要する語句の検討, 日整会用語集との整合性を図ること, さらに, 日形会, 先天異常研究会との関連用語の共同

検討，などである。また，手関節部の靭帯図を加えることにした。広く衆知を結集するために，全評議員にお願いして，前刊全ての用語を2～3頁ずつ，各2名で分担検討して頂き，この検討結果を基にして改訂作業に入った。作業は煩雑をきわめ，年6回，各5時間程度の委員会を開催し，一時の夏は合宿作業も行い，平成18年末にやっと全ての検討を終了した。

前刊までの著作権は南江堂にあったが，今回からは自前でExcelに全語句を記載しており，著作権は日本手の外科学会に移る事になる。日手会会員その他の医師がより安価に購入し易くするため，これまでの表紙体裁を若干変更する事にした。

発刊形態は昨年の評議員会・総会で冊子とCD化の併用とする事の承認を得ているが，第50回日本手の外科学会学術集会開催時にまず冊子を出版する事にした。

CD化については，一般辞書並に使用しやすい索引機能付きのものとするため，次期委員会で鋭意検討し，なるべく早い時期に出版する予定である。

平成6年に日本手の外科学会より発刊された索引号としての改訂版に生田教授は「用語集というものは話し言葉に似たものがあるが，時代とともに変わって行くのが当然です」と記されているが，今回の改訂版が完璧なものと思っておらず，今後忌憚のない様々なご意見を頂きながら，将来さらに完璧な用語集に変容していく事を願う次第である。

国際委員会

委員長 金 谷 文 則

平成18年度の国際委員会の活動について報告いたします。国際委員会は岡島，柿木，五谷，平瀬，堀井各委員と委員長の私，水関担当理事，山内，阿部アドバイザーの計9名で構成されています。本年度は9月に委員会を予定していましたが，Japan Hand Fellowの応募が1人のみだったため郵送による持ち回り審議とし，第1回委員会を12月に開催し，他にメールを使った回り持ち委員会で審議を行いました。

1. 新 Corresponding Member の推薦について：

平成18年度は審議しておりません。

2. JSSH-ASSH Traveling Fellow の選出

Traveling Fellow 2名に対して，本年度の応募者は5名であり，岡山済生会総合病院整形外科 今谷潤也先生と東邦大学第2整形外科 戸部正博先生を推薦しました。昨年から日手会ニュースに加えて主任教授，各評議員にも呼びかけたところ多くの応募を頂きました。本Traveling Fellowは日手会の代表であり，より多くの応募者から適当な人物を選ぶことが望ましく，平成19年度も多数の応募を期待しております。

3. JSSH-HKSSH Exchange Traveling Fellow の選出

Traveling Fellow 1名に対して，本年度の応募者は3名であり，審議の結果名古屋大学手の外科 篠原孝明先生を選出しました。2007年2月10日-11日開催の香港手の外科学会 Annual Meetingに参加して頂きました。2005年までは香港手の外科は5月開催でしたが，2006年，2007年は2月開催であり，2008年のAnnual Meetingも2月に7th APFSSHと併催されるとのことですのでJSSH-HKSSH Exchange Traveling Fellowの募集時期を早めることを理事会に提案しました。

4. Bunnell Traveling Fellow

2007 Sterling Bunnell Traveling Fellowに選出されたDr. James Changは第50回日手会学術集会時に来日されます。

5. Japan Hand Fellowship

第2回 Japan Hand Fellow の応募が韓国の Dr. In-ho Jeon 1名のみであり国際委員会から推薦し理事会で承認されました。昨年は3名の応募から2名を選出しましたが、今年は1名のみと少し寂しい気がします。昨年度から開始した fellowship ですが、まだ知名度が低いようです。APFSSH, IFSSH などの機会に宣伝して行きたいと考えております。Traveling fellow 訪問先の先生方には国際交流の観点からご配慮をお願いいたします。

6. 第2回日伊 Hand Club

2006年10月13日に第2回日伊 Hand Club がミラノで開催され、日本から52名と多数の参加があり盛会裏に終了しました。

7. APFSSH

2006年11月15日-18日に6 APFSSH が開催されました。10月のクーデターのためか、参加者は344名でしたが、日本からの参加者も多く見受けられ盛会裏に終了しました。次回は2008年2月14～17日に香港にて開催予定です。香港手の外科学会より日手会から多くの演題応募、参加が要望されています。

8. IFSSHについて

2007年3月にシドニーで10th IFSSH が開催され Pioneer of Hand Surgery として日本から上羽先生、玉井先生が受賞する予定とのことです。また、12th IFSSH に現在、アルゼンチン、インド、シンガポールの3カ国が立候補しており今回の10th IFSSH で決定する予定です。

9. 第5回日米合同手の外科会議について

2010年3月20-22日オアフ島以外で開催予定です。今回は日本側主催ですので、ふるってご参加ください。

10. 日手会委員会英語名の検討

日手会委員会の英語名につき理事会から検討するように指示があり、現在鋭意作業中です。

11. FESSH traveling fellow

FESSH traveling fellow として Dr. Vedung が来日されました。日手会の公式事業ではありませんが、国際親善の意味もあり国際委員会が訪日先をアレンジいたしました。今回は光嶋先生、玉井先生、土井先生に大変お世話になりました。ありがとうございます。

12. ASSHへの Guest Society としての招待

来る9月27～29日、米国シアトルで開催される米国手の外科学会へ初めての企画になる“guest society”として公式に招待されることになりました。日手会の会員には展示ブース、会長懇親会など様々な特典が与えられることとなります。委員会として米国側との交渉の窓口になり交渉を進める予定です。

13. 国際委員の改選

岡島先生、平瀬先生が任期満了に伴い国際委員を交代します。4年間ご苦労様でした。

広報委員会

担当理事 田 中 寿 一
委員長 青 木 光 広

平成18年度の広報委員会は、平成19年4月に山形で行われる日本手の外科学会50周年記念式典、祝賀会の開催を担当するため山形の高原委員を含め6名のメンバーにあらたに副島 修委員を加えて活動を開始しました。オンライン会員管理システムの本格的導入にあたり、日本整形外科学会のインターネット委員である堀内行雄アドバイザーに積極的に参画していただき、池上委員を中心として審議を行いました。また、例年の活動として副島・香月委員により日手会ニュース27号、28号を発行しました。第3の活動として、戸部、砂川、香月委員らによるワーキンググループを作り日手会パンフレットの改訂作業を実施し、20数名の評議員、名誉・特別会員から寄せられたアンケートによる校正案を取りまとめ、本年度末までにパンフレット#1より#24までの改訂を終了する予定です。いただきました貴重なご意見に深謝いたします。パンフレットには旧版の在庫も存在するため、新たに印刷が仕上がったものから、順次関連学会・研究会を通して会員に配布いたします。平行して、日手会パンフレットDVDの作成に着手しました。DVDはそれぞれの対象疾患あたり6から10ページのナレーションつき動画フラッシュで構成されています。編集が可能な何編かを完成させ、第50回手の外科学会で評議員に配布いたします。この際、まことに恐れ入りますが、代金として千円を受け取らせていただきます。専門医や教育研究施設にも購入していただく予定です。ぜひご協力ください。その他の活動として、日手会グッズとして、戸部委員が担当し新たに2柄のネクタイをデザインしました。ストライプと配色に工夫を行い日手会マークを織り込んで、皆様身に付けていただけるもの製作し、50周年に合わせて販売いたします。

日本手の外科学会50周年記念式典は平成19年4月19日木曜日、日手会の第1日目の18時より、学術集会第1-2会場（山形国際ホテル）で行われます。来賓、パイオニアをお招きし、日本手の外科学会にふさわしい厳粛な雰囲気で行いたいと考えております。記念式典には学会参加者全員に出席していただきたいと考えておりますので（日手会理事長）、評議員の方は学会出席者にその旨をお伝えください。その際に、手の外科学会50周年記念小冊子を配布し、学会の沿革を記したブースを展示いたします（戸部委員）。式典の後、メトロポリタン山形にて記念祝賀会を行いますので、評議員・会員の皆様の登録（ネットまたはファックス）をお願いいたします。

日本手の外科学会オンライン会員管理システムの導入にあたり、数社より提出された見積もりを検討し、京葉コンピュータサービス株式会社を選定し、システム開発準備として仮契約を行いました。同社は既に日本脳神経外科学会のオンライン会員管理システムと電子ジャーナル発行などの実績もあるだけでなく、日本整形外科学会の会員カード管理システム導入を実際に担当しております。日本整形外科学会ではご存知の通り、既に会員カードの発行やオンライン決済に向けての準備が行われています。日本整形外科学会は平成20年、第81回札幌での学術総会の開催に合わせてすべてのオンラインシステムを可動する予定です。日手会ではこれにあわせてオンライン会員管理システムの導入を計り、可能であれば日整会のオンラインシステムと同様なシステムを作ることを検討しております。現在、そのシステム開発、会員登録、セキュリティー、日手会事務局の会員管理システムの更新などの準備に取り掛かっています。将来的には、オンライン投稿・査読システム、電子ジャーナル、オンラインでの専門医の単位管理、オンライン決済システムの導入に繋げて行くことも見据えて検討しております。以上、広報委員会では仕事量が多く、委員は奮迅して活動していることを、ご報告いたします。

社会保険等委員会

委員長 野口政隆

社会保険等委員会は、外科系学会社会保険等委員会連合（外保連）を通じて診療報酬改定作業へ参加しています。平成18年4月の改定では、神経交差縫合術が新規に、舟状骨偽関節が前腕の項目に採用され、茎状突起管開放術が腱鞘切開術に合併となりました。今年度行いました主な外保連活動は以下のとおりです。

1. 手術試案の医療材料費のうち、手の外科に関する分野について調査、提出した。
2. 新術式として指伸筋腱脱臼整復術を申請した。
3. 同一手術野における複数手術の加算要望として以下のものを日整会を介して提出した。
 - (1) 骨折非観血的整復術と骨折経皮鋼線刺入固定術
 - (2) 手根管開放術と腱移行術
 - (3) 神経移植術と他の手術
 - (4) 関節形成術と腱移行、腱移植術

なお、(3)に関しては通則への採用を考え、日手会からも医療技術再評価希望書として厚労省へ提出した。

また、平成18年度全国整形外科保険審査会議において、未解決問題としての手関節形成術、指関節形成術、肘関節形成術についての質問に対して、日手会の見解として以下のように回答しています。

関節形成術には、単純な病的関節切除から人工関節置換術までが含まれると考えており、人工関節置換術はK082として保険収載されているので、これを除外した関節機能再建術であると解釈できる。

A. 手関節形成術

1. 関節リウマチや変形性手関節症による遠位橈尺関節障害に対して行われる関節機能再建手術法で、尺骨頭単純切除術（Darrach法）、Suuve-Kapandji法などを含む
2. キーンバック病などに対して行われる手根骨切除術（部分切除および全切除を含む）

B. 指の関節形成術

1. 関節リウマチなどによる中指指節間脱臼に対して行われる、関節切除後に腱や掌側板などの中間挿入膜を挿入して脱臼を整復し、関節機能の改善をはかる手術
2. 母指CM関節に対して行われる、大菱形骨切除後の空隙にスペーサーや腱による置換を行ってCM関節の除痛と安定化をはかる手術

C. 肘の関節形成術

1. 変形性肘関節症などに対して行われる、骨の形成的切除により関節の適合性を改善して除痛と関節可動域増加をはかる手術
2. 陳旧性の靭帯損傷などに対して行われる靭帯・関節包再建によるアライメント再建手術

以上は全国整形外科保険審査委員会議にて了解されたものではありませんが、今後の保険審査のひとつの目安になるかと思われます。

毎年日手会学術集会時に開催しています保険診療に関するランチョンセミナーも社会保険等委員会の重要な活動のひとつであり、第50回日手会学術集会では、立花新太郎アドバイザーが講演します。多くの会員の皆様の参加をお待ちしています。

先天異常委員会

委員長 福本恵三

本年度の先天異常委員会は、柴田 実担当理事、石川浩三、石田 治、川端秀彦、高山真一郎、福本恵三各委員で構成されています。

委員会では毎年、学術集會会期中に先天異常懇話会を開催しております。本年度も第46回先天異常懇話会をランチョンセミナーの時間帯にプログラムに取り入れていただきました。内容については前回行ったアンケートの結果を踏まえ、症例検討方式で行う予定です。次期学術集會には先天異常を専門とする外国人招待講演者が多く出席され、懇話会にも参加していただけると思います。実りある討論が期待されますので、多く皆様のご発表、ご出席をお待ちしております。

昨年度より合指症術後の評価基準を作成していましたが、委員で試用を行い最終案が完成しました。理事会に提出し、機能評価委員会の承認が得られれば、近い将来お手元に届くこととなります。昨年完成した母指多指症術後評価法と同様、優れた評価法であると自負してあります。会員の皆様には学会発表、論文等にぜひ採用していただき、国際的にも認められるような評価法に育てていただきたいと願っています。

小児手の総合的機能評価法については適当なものがないように思われます。そのため委員会では新たに作成することとし、本年度より検討を開始しました。既存の評価法STEFなどの小児に対する試用を行っていますが、DASHのような評価についても検討することとしました。就学前の5、6歳を対象に、有用な方法を作成したいと考えております。

手の先天異常症例の登録は個人情報保護の観点から大きな転換を迫られております。従来の形式での症例登録は、多くの個人情報を含むため現在の倫理規定からは適当でない判断いたしました。よって今までお願いしておりました先天異常登録は中止することとしました。今まで行なって参りました先天異常登録は、1996年先天異常委員会で作成した手先天異常の分類マニュアルの大規模な実施モデルとなり、その検討結果が1999年の一部改正にも反映されるなどたいへん有益なものであったと考えております。ご協力いただきました皆様には改めて感謝申し上げます。今後は個人情報保護法に則り倫理規定を満たす登録方法に変更して参ります。先天異常登録を行なうにあたっては明確な目的を設定する必要があると考えます。その目的の一つは、本邦における手の先天異常の疾患別の発生頻度を調べることで、遺伝形式・家系発生の可能性・確率を明らかにし、患者、家族に有益な情報を与えることでありましょう。全疾患を扱うのは困難ですので疾患、登録期間を限定する案が出されました。比較的家系内発生の多い裂手症を取り上げることとし、今後登録方法を検討していく予定です。より有益な登録事業となるよう努力して参りますので、皆様のご協力をお願いいたします。

倫理委員会

担当理事 浜田良機

日本手の外科学会では、①同種移植に際しての倫理的問題、②会員の不祥事あるいは犯罪に対する対応、③患者のプライバシーの保護、④事務局に保管されている会員個人情報の管理について検討するため、平成16年に倫理委員会が設立されました。

委員会創設時の担当理事は三浪明教授、委員長は浜田良機、委員として浅見昭彦、鈴木重彦、平田仁、柳瀬 義章、渡邊健太郎、アドバイザー玉井 進の各先生方によって第一回委員会が平成17年6月3日に、そして第二回倫理委員会が同年9月16日に開催され、最重要課題から検討をするこのこ

とで、まず①学会発表、投稿論文での個人情報の保護、②会員の不祥事、犯罪への対応 ③事務局での会員の個人情報の取り扱いについて、検討を開始しました。その結果、昨年度中に①学会発表、投稿論文での個人情報の保護、②会員の不祥事、犯罪への対応 ③事務局での会員の個人情報の取り扱いの3点については、その対応策を理事会に報告了承されました。したがって現在、残されている検討課題は、④同種移植、再生医学への倫理的規範の作成であります。この同種移植、再生医療については、日本整形外科学会をはじめとして、関連学会では、すでにガイドラインが作成されています。したがりました手の外科学会会員は、まず日本整形外科学会、形成外科学会のガイドラインを遵守した医療を行わなければなりません。その結果として手の外科特有の問題が発生した場合は、それに対する対応を協議することにしております。

平成18年度からの委員会の構成は、担当理事が浜田良機、委員として浅見昭彦、清水克時、鈴木茂彦、三浪明男、梁瀬義章、渡邊健太郎の先生方であります。

昨年、倫理的不祥事で退会された手の外科会員の再入会の希望がだされました。これは会員の不祥事に対する対応とは別の問題であり、いままでになかった事例であります。理事会での討議の結果、再入会が認められましたが、今後、このような問題については、倫理委員会で審議するようのご指示がありましたので、今後は新入会員、再入会員について、倫理的な側面からの資格審査をどのように行っていくのかを今後討議する予定です。

専門医制度委員会

委員長 三浪明男

日本手の外科学会認定専門医が正式に発足し、特例措置により会員の一部の先生には既に審査結果の通知がなされております。当委員会は専門医制度に関するほかの委員会（資格認定委員会、専門医試験委員会、教育研修カリキュラム委員会、施設認定委員会）のアドバイザー的委員会として設置されております。従って、申請書類の審査が資格認定委員会で行われ、その場で議論となった例について資格認定委員会との合同委員会を開催し、合同討議して理事会にその決定などを具申しております。今回は資格認定委員会とその合同会議により、結果として449名の専門医認定を行いました。先回の理事会において全員の専門医認定が承認されました。また評議員経験者については特例措置として現評議員などと同様の処置とすること、特例申請時期については、今後、平成19年10月1日～10月31日と平成20年10月1日～10月31日の2回申請を受け付けることとしたことなどについても決定しました。今後は各専門医からの施設（基幹施設、関連施設）認定の申請を受け付け、施設認定委員会での審議後に合同会議を開催して最終決定し、理事会に具申予定です。1月からは教育研修講演の申請を受け付け、第1回の専門医試験は今のところ平成21年4月の日本手の外科学会学術集会時に行われる予定です。まだ発足したばかりで多くの疑問・不備が指摘されていますが何とかスムーズに定着してもらいたいと思っています。今後会員諸兄のご高配のほどお願い申し上げます。

資格認定委員会

委員長 中島英親

資格認定委員会のメンバーは、藤 哲担当理事、石川淳一、澤泉卓哉、西 源三郎、牧野正晴、正富 隆、村上恒二の各委員と、委員長の中村英親で構成されています。主な事業内容は、①専門医受

験資格者の書類審査および合否判定, ②専門医の資格更新認定, ③特例措置による専門医申請の審査および合否判定, 等です。

2006年6月3日(土)東京において、藤理事より「まずは特例措置による専門医申請を議題に」ということで、第1回委員会を開催しました。会議の内容は、1. 申請者数が東京、大阪に偏って多い場合は同地区の評議員に尽力いただく(この時点では、偏り等の問題ないであろうとの憶測でしたが、実際は申請数が多く大変でした)。2. 手の外科学会途中退会を合計し10年以上あれば良いか。3. 申請内容が不明の場合、最後に問い合わせる場合があるという項目をいれるか。4. 査読が確立された雑誌を明確にする。5. 承認された雑誌以外はその他とし、資格認定委員会で決定する。6. 資格証明書カードの検討。など22項目にわたり検討しました。

2006年7月5日(水)に札幌グランドホテルで第1回専門医制度委員会があり、資格認定委員会、専門医試験委員会、教育研修カリキュラム委員会、施設認定委員会の理事、委員長が集まり、各委員会の事業内容が検討されました。

その後2006年10月1日～11月20日の期間、特例措置による専門医申請が行われました。申請者数は下記に記載しますが、453名に達しました。

- ① 日本手の外科学会 名誉会員・特別会員・評議員
 - ② 正会員のうち、申請時において引き続き10年以上会員である者
- | | | | |
|-------|------|------|------|
| 北海道 | ① 11 | ② 17 | 計28 |
| 東北 | ① 19 | ② 30 | 計49 |
| 関東 | ① 74 | ② 77 | 計151 |
| 中部 | ① 32 | ② 30 | 計62 |
| 関西 | ① 42 | ② 42 | 計84 |
| 中国・四国 | ① 23 | ② 19 | 計42 |
| 九州・沖縄 | ① 19 | ② 18 | 計37 |
- ①による申請：220名 ②による申請：233名 合計453名

453名という多数の申請数に驚きました。膨大な申請書類を事務局にて整理し、地区ごとに仕分けしたのち、それぞれの地区委員に送付されました。委員も地区によっては、151件、84件、62件と担当審査数が非常に多く、限られた時間で、書類内容、症例等の確認を行うのは大変な作業だったと思います。時間に余裕があれば、もう少し多人数で準備ができたかと思いますが、委員の先生方にはご苦労様でした。

書類審査でもっとも問題になったのは、査読の確立された雑誌に掲載された論文であるか否かの判断でした(日本手の外科学会雑誌は1999年から査読された論文が掲載されています)。また、提出症例においては、画像等の貼付がされていないものもありました。このような場合、合否判定前に書類の不備、不明点を申請者に連絡し、訂正をお願いしました。

皆様のご協力で、第1回特例措置による専門医申請の審査は無事終了いたしましたこと、厚く御礼申し上げます。最後に、事務局の皆様、大変お世話になりました。

専門医試験委員会

委員長 和田卓郎

専門医試験委員会は水関隆也担当理事、落合直之アドバイザー、長野 昭アドバイザー、石田 治委員、加藤博之委員、鈴木克侍委員、田中英城委員、平瀬雄一委員と委員長の和田卓郎の計9名が構

成しています。平成21年4月の第1回専門医試験に出題する問題を作成するのがミッションであります。当委員会のこれまでの活動の概要について報告させていただきます。

昨年8月には、全評議員に4題の筆答問題の作成を依頼しました。作成分野の偏りを避けるために、あらかじめ作成希望分野のアンケートを行い、その結果に基づき委員会から分野を指定させていただきました。お蔭様で、総計789題の問題が集まりました。評議員の皆様のご理解とご協力に対して、この場を借りて篤くお礼申し上げます。

現在、評議員作成問題のブラッシュアップに取り組んでいます。まず、東京地区（田中委員、平瀬委員）、中部地区（加藤委員、鈴木委員）、広島地区（石田委員、水関理事）の3つの小グループで問題の修正を行い、全体会議で再度審議して完成させるという作業です。エビデンスに基づいた出題がなされているか、ひとつの問題文で2つのことを聞いていないか、2重否定になっていないか、難しすぎないか、やさしすぎないか、などをチェックしながら一題一題問題を仕上げています。当初の予想をはるかに超える重労働で、1回の委員会で25題程度の問題を審議するのが精一杯です。平成20年4月の手の外科学会までに、何とか200題の問題ストックを作りたいと考えています。

実際の筆答試験では何題の問題を出題するか、合格ラインは合格率におくか、60点にするのか、また、口答試験はどのような形式で行うか、など検討すべき問題が山積みされています。まだ、手探りの状態ではありますが、平成21年の第1回専門医試験にふさわしい良質な問題が作成できるよう、熱意を持って取り組んで行きたいと思えます。

教育研修カリキュラム委員会

委員長 田 嶋 光

いよいよ本年1月をもって、第1回の日本手の外科学会認定手の外科専門医が登録されました。本制度を確立するに際しては幾多の議論がなされてきましたが、その骨子は以下の二点にありました。第一に“手の外科”を専門領域として、日本の医療界および社会に認知させ市民権を得ること、第二に手の外科専門医として継続的な教育研修制度を確立することです。この間の教育研修制度としては、日手会主催の春・秋2回の教育研修会が前者は advanced、後者は basic なものを内容として、主としてこれから手の外科を目指す整形外科医、形成外科医の教育の場としておよび熟練者の希望による継続教育の場として開催されてきました。今後は専門医資格取得、専門医の資格継続として、教育研修制度が必要であり教育研修カリキュラム委員会が担っていきます。メンバーは柴田 実担当理事、荻野利彦、麻生邦一アドバイザー、田嶋 光委員長、栗原邦弘、長岡正宏、橋詰博行、山中一良委員からなります。

日手会認定手の外科専門医認定の申請、専門医の資格更新に際しては、日手会教育研修カリキュラム委員会が認定した関連学会・研究会で開催される教育研修講演を受講し必要な単位数を取得しなければなりません（詳細は日本手の外科学会認定手の外科専門医制度規則参照）。今回の第1回目で登録された500名に近い専門医の資格維持と今後の新専門医の受験資格獲得のためには、従来の年2回の春・夏の研修会では内容、回数とも不足しており関連学会・地方学会、地域での講演会からの申請によりカリキュラム委員会として、日手会研修講演として認定していきます。

手の外科専門医制度発足に当たっては、手の外科の専門性の保持と若手整形外科医・形成外科医が二の足を踏むことなく手の外科を目指せるよう無理のない研修カリキュラムを吟味・選定してきました。教育研修体制の確立が、既に専門医となられた人は自らの継続的な生涯教育のため、周囲の若手医師には手の外科のすばらしさを宣伝・鼓舞する場としての一歩となればと考えています。

施設認定委員会

担当理事 河井 秀夫

日本手の外科学会認定手の外科医449名の手の外科専門医が、この度の特例措置によって誕生した。そして、日本手の外科学会認定手の外科専門医制度による研修施設認定の申請を、平成19年1月20日から2月20日の間に受け付けた。2月20日現在、基幹研修施設の申請が198件、関連施設の申請が56件である。施設認定委員会の構成は、田中寿一（担当理事）、堀内行雄（アドバイザー）、奥津一郎（委員長）、酒井和裕、島田幸造、西田 淳、南川義隆（以上委員）と私の8名である。平成19年3月18日に第一回日本手の外科学会施設認定委員会を開催し、申請された施設の認定の適否を検討する予定である。認定対象となる施設は、基幹研修施設と関連研修施設からなる。基幹研修施設になる条件は、（1）手の外科手術が3年間平均して100例／年以上あること、（2）臨床指導にあたる手の外科専門医が1名以上常勤していること、（3）手の外科専門医研修カリキュラムに基づく研修ができることである。但し、大学病院等はその背景を考慮し特別措置として委員会の議を経て認定される。また、関連研修施設の条件は、（1）手の外科手術が3年間平均して30例／年以上あること、（2）専門医が常勤、または専門医が週1回以上定期的に指導していること、（3）手の外科専門医研修カリキュラムに準じた研修ができること、（4）基幹研修施設の長または専門医の推薦を受け、関連研修施設の長が承諾していることである。関連研修施設の場合には、認定を受けようとする施設から直接の申請はできず、基幹研修施設とともに申請された場合のみ受け付けられる。異動に関する特例として、日本手の外科学会認定手の外科専門医が、関連研修施設または研修施設として認定されていない施設に異動した場合、3年の手術件数の集計を待たず1年間の手術件数などの実績により申請することができる。専門医制度のための委員会として、専門医制度委員会、資格認定委員会、専門医試験委員会、教育研修カリキュラム委員会、施設認定委員会の5つがあり、それぞれ認定手の外科専門医制度のために活動している。日本手の外科学会認定手の外科専門医制度が開始されるに際して、認定手の外科専門医が医療者にも社会的にも認知されるとともに患者様のニーズに適合し、患者様の要望に合うような手の外科専門医制度に発展することを願っている。

雑誌 Hand Surgery についての報告とお願い

Editor in Chief 生田 義和

1996年に発刊されたこの雑誌の編集を、香港から日本に引き継いだ2002年以来、何とか4年間出版を続けることが出来ました。初めに、アドバイザー、編集委員、査読委員、ならびにご支援していただいた関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

さて今回は、この4年間の投稿原稿数や採択率など、少し詳細な内容をまとめてご報告いたします。

査読をお願いしているのは、日本人では常任の編集委員5名、日手会の国際委員会委員と日手会雑誌の編集委員会委員の中から12名、さらに2名のアドバイザー、合計19名の方々です。外国の方々合計9名で、1編の論文を日本人1名と外国人1名のペアで査読しています。

日本での最初の編集である2003年から2006までは年2冊の発行で、3年半で141編が採用され、各号の平均論文数は25編でした。採用率は2002.3-2003.4が32/40（80%）、2003.3-2004.4が55/81（67.9%）、2004.3-2005.4が45/75（60%）、2005.3-2006.4が22/50（44%）と少しずつ厳しくなっていますが、

3年間の合計は154/246（62.6%）でした。

査読時の採用基準については、原稿の多寡によって左右されること無く、常に質の高い雑誌を目指しています。

一方、購読札数に関しては、IFSSHに加盟している国の数や人口に比較して少し低いと思っておりますが、2006年は総数533冊で、その内訳は日本：358、オーストリア：117、英国：9、アメリカ：9、ネザーランド：8、香港：5、シンガポール：4、フランス：4、ドイツ：3などでした。アジアの国に属する韓国、タイ、その他の国が1-2冊であることに対して購読者数の増加を依頼しているところです。中国はまだAPFSSHに加盟していませんので、2冊に留まっていますが、近いうちに加盟する予定になっており、購読者数の増加につなげたいと考えています。

また、投稿論文数（2003-2006）については、日本83、UK47、オーストラリア21、香港17、シンガポール15、アメリカ13、トルコ10、インド7、中国6、イタリア5、サウジアラビア5、台湾5、タイ5となっています。

この雑誌の特徴として、投稿から掲載までの期間が短いこと、査読者に日本人が必ず入って懇切で丁寧な査読していること、したがって、論文の質を高めるための著者の労力が、他の雑誌に投稿することに比較して数段少ないこと、などです。どうか今後とも、優秀な論文を多数掲載することが出来ますように、皆様方の優れた論文を奮って投稿していただきますように、お願いいたします。特にキャリアを積んだ方々は、若い研究者、臨床医にお勧めいただきますよう、お願い申し上げます。

2006年度 IFSSH 代表者会議報告

阿 部 宗 昭

2006年度のInternational Federation of Societies for Surgery of the Hand(IFSSH)Delegates Committee Meetingは2006年6月28日、スコットランドのグラスゴーで、第11回欧州手の外科学会(Federation of the European Societies for Surgery of the Hand)の会期中に開催された。参加国は50メンバー国中17カ国、役員はPardini 理事長、Urbaniak 副理事長、Mennen 事務局長、historianのCooney、IFSHT(International Federation of Societies for the Hand Therapy)の代表であり、昨年同様少なかった。以下にその概要を報告する。

開会に先立ってMennen事務局長からGoldner JL (USA)、McFarlane R (Canada)が逝去されたことの報告があった。

理事長 (Pardini) 報告

最初に、IFSSH参加国が協調し合って手の外科の専門性を高めることが必要であることが強調された。IFSSHには34の委員会があるが、活動していない委員会もあるので各委員長に活動報告をするようe-mailしたが、返事をくれたのはわずか8委員会であった。委員会活動はIFSSHの大きな事業なので、更に報告を求めていく。(この8報告中2報告(先天異常-荻野、バイオメカ-森友)はJSSHからのものであった)

事務局長 (Mennen) 報告

最初に、手をわずらう患者に最適の治療をするには手の外科医とセラピストが協力しあうことが必要なことを強調した。

1. Member Societies :

チリが加盟し50カ国になったが、この代表者会議には16カ国しか出席していない。今後は、出席できない Society は代理を送るよう要請する。各代表者は会議報告やニュースレターを各 Society の会員に報告するよう要請があった。

2. 10th Congress 2007-Sydney, Austraria

2006年3月にシドニーに行き、準備状況を視察してきたが、Hicks 会長、Tonkin 事務局長の努力で順調に準備が進んでいる。Scientific のみならず、Social event も充実しており、すばらしい学会になることは間違いない。Not to be missed by any member!!

3. The 11th Congress 2010-Seoul, Korea :

Delegate の Moon Sang Chung から website(www.IFSSH2010.com.)ができたことの報告が後であった。

4. The 12th Congress 2013 :

正式な申し込みはまだないが、4カ国が興味を示しており、会議の最後に本日参加の4 Societies (Argentina, India, Singapore, England) から presentation をしてもらう予定である。最終決定は3月のシドニーでの選挙で。

5. JHS Information page

JHS(Am)に Information page があることは前回の報告でも紹介したが、British & European Volume と Hand Surgery (editor in chief 生田名誉会員)にも Information page が出来るよう交渉中である。

6. IFSSH との協調関係

第10回のシドニーでは、初めて IFSSH が IFSSH と同時に開催されるが、これからも出来るだけ同時開催出来るよう強調体制を強化したい。

7. Pioneers of Hand Surgery

70歳以上で、国内のみならず国際的に貢献した hand surgeon を推挙して欲しい。被推薦者は Nominating Committee で検討し、シドニーでの Opening ceremony でアナウンスし表彰予定である。(日手会からは上羽、玉井名誉両会員を推薦した)

8. Swanson Lecture

手の外科と IFSSH の設立に貢献した Alfred Swanson を讃えてシドニー学会から Swanson Lecture を始めることが提案され、スウェーデンの Lundborg が最初の lecturer に決まった。

9. Educational Bursary

Developing country の手の外科の教育に対して奨学金制度を作っていることの報告はあったが、運用については述べられなかった。

10. Newsletter

IFSSH からの情報は、毎回ではないが JHS (Am) の最後のほうに AIMS として Newsletter を出している。メンバーからの情報を歓迎するので、Mennen 事務局長へ送って欲しい。

会計報告：

収入

前年度繰越金	\$ 524,460.52
加盟国からの会費	\$ 31,745.00
第9回ハンガリーからの寄付	\$ 18,000.00
その他	\$ 32,998.08
計	\$ 607,203.60

支出合計

役員、事務局員の出張費、

Elsevier expenses など \$ 22,951.23

次年度繰越金 \$ 584,252.37

(バランスはいいようであるが、加盟国からの支払はいいとは言えず、1/3近くが未納であった。Developing country ではないカナダ、ニュージーランド、台湾、スカンジナビア、シンガポール、タイが過去4年間、未納であることは問題である。第10回シドニー会長のHicksからは未納のSocietiesには投票させないようにしてはとの意見もあった。)

この後、Hicks会長から第10回の準備状況が報告され、HistorianのCooneyからハンガリーの時と同様に、IFSSHの歴史を展示するブースをシドニーでも用意していることが報告された。

以上、送られてきた議事録も参考にしながら概要を報告した。次回代表者会議は第10回の学会開催地シドニー(2007年3月11日～15日)であるが、この日手会ニュースが発行される頃には終わっていて、第12回の開催国は決まっているかもしれない。報告したように、IFSSHのニュースレターはJHS(Am)に年5～6回出ているので、JHS(Am)をとっている会員は目を通していただければ幸いである。

第6回 APFSSH 報告

広島県身障者リハビリテーションセンター
水 関 隆 也

第6回アジア太平洋手の外科学会(以下、APFSSH)は2006年11月15～18日の間、タイ、バンコクでPanupan Songcharoen会長の下、開催された。2004年の第5回APFSSH大阪大会ではタイからも多くの会員が参加してくれたので日手会としてもできる限りの協力をしようという方針の下、参加を呼びかけていた。ところが、思いがけず10月に勃発したクーデターのせいで、外務省が渡航自粛勧告を発令する事態になり、理事会としても危急の対応が迫られた。会長に現地の状況、学会の延期の可能性等を問い合わせた所、日常生活は何も変わっていない、学会も予定どおり開催の方針なので日手会からも多くの会員に参加して欲しい、旨の依頼があった。理事会での審議の結果、学会としては自主判断での参加を呼びかけることで落ち着いた。

会場はShangri-La Hotelという5星の最高級ホテルであった。会長の発表では全参加者数は344名とのことであった。国別の参加者数は問い合わせても返答がないため正確な数は不明であるが、日本からの参加者はおよそ60名であっただろうか。それでも関係国のなかでは最多参加国であったと思われる。予定演題を拝見すると、かなりのキャンセルがあったようで、クーデターが悔やまれる。

学会の進行はとにかく欠演が多く、また発表の場所、時間が最終プログラムで変更されていたり、座長が急が変わったりで、お世辞にもスムーズな進行ではなかった。それでも会場は熱気で包まれ、予定時間を超える質疑応答が続いた。日本からの演題は若い人たちのものが多く、彼らの活躍も注目に値した。2日目の夜はThai Nightと称して、参加者一同は華やかなタイ舞踊、タイ料理で歓待を受けた。主催国タイ会員の親切心が身にしみた。

今回は、2008年2月14～17日、香港で開催される。香港手の外科学会から、是非多くの日手会員に参加して欲しいとの依頼を受けている。詳細は<http://www.mvdm.com/apfssh/>を参照されたい。

終わりに、タイの政情不安にも係わらず、参加していただき、会を盛り上げていただいた会員諸兄にお礼を申し上げます。



歓迎レセプション、Thai Nightで談笑する50回日手会
会長荻野夫妻と10回IFSSH学術委員長Tonkin夫妻

◆ホームページに関するご案内（広報委員会 担当：池上博泰）

日本手の外科学会のホームページ(<http://jssh.gr.jp/>)に実際にアクセスされた会員も数多くいらっしゃるかと思います。現在の日本手の外科学会ホームページは、事務局であるヒズ・ブレインの好意で、作製運営されていました。現在も“広報委員会手の外科シリーズのパンフレット”を一部動画でダウンロードできるようなフラッシュ版の作製に取りかかっています。現在のホームページは、比較的動作も軽く、事務局からのお知らせ、他学会の開催日時やリンクなどの好評を得ていましたが、広報委員会の事業報告でも記載されているオンライン会員管理システムが導入されれば、日本手の外科学会のホームページも大きく変更する予定です。会員アンケート調査で要望の多かった会員専用ページやオンライン投稿・査読システム、電子ジャーナル、オンラインでの専門医の単位管理、オンライン決済システム、の導入などを見据えたホームページにしたいと考えています。

会員の皆様の要望をできる限り反映したホームページの作製を考えていますので、何か要望やアドバイス等があれば、いつでも広報委員会に連絡をいただければと思います。

◆専門医制度に関する事務局からのお知らせ

昨年の専門特例申請に際しては、予想を大幅に上回る多数のご申請をいただき、また全く想定していなかったご質問やご指摘が相次ぎ、事務局も対応に大童で、何かと不行き届きな点がございましたこと、どうぞご容赦ください。

今後の予定などについて、簡単にお知らせいたします。

1) 専門医手帳・研修手帳について

研修の記録は、すべて専門医手帳あるいは研修手帳で行います。総会終了後に印刷・発送となりますので、5月中旬にお手元に届く予定です。また、専門医に認定された先生方の認定証も同封の予定です。

2) 日手会認定教育研修講演について

いよいよ4月から日手会認定の教育研修講演が始まります。開催の予定は、日手会からはホームページでのご案内のみとなりますのでご注意ください。また、受講証明は手帳に貼り付けるシールの形となります。手帳が5月になりますが、シールは再発行できませんので紛失しないようにご注意ください。

3) 研修施設の認定について

去る2月20日に締切りました第1回目の研修施設の申請は、施設認定委員会の審査を経て、4月に開催の理事会において審議、承認という手順になります。審査結果は5月上旬にお知らせする予定です。また、今後の申請は随時受け付けますが、審査は年3回行われる予定です。

4) 学術集会参加単位について

昨年の総会でご案内しました通り、第49回学術集会への参加は申請の条件として認められていますので、参加章を紛失しないよう保管してください。

関連学会・研究会のお知らせ

★第50回日本形成外科学会総会・学術集会

会 期：平成19年4月11日(水)～13日(金)
 会 場：東京都／ホテル日航東京
 会 長：栗原邦弘（東京慈恵会医科大学形成外科）
 詳細は <http://square.umin.ac.jp/jsprs50/>

★第30回末梢神経を語る会

会 期：平成19年4月19日(木) 11:30～12:30
 会 場：山形／山形国際ホテル（第50回日本手の外科学会学術集會会場）
 タイトル：「筋電図、神経伝導検査の基礎と臨床
 －データの見方と陥りやすいピットホール－」
 講 師：慶應義塾大学月が瀬リハビリテーションセンター所長
 慶應義塾大学教授 木村 彰 男 先生
 当番世話人：川崎市立川崎病院 堀内 行雄
 北海道大学 三浪 明男
 日本大学駿河台病院 長岡 正宏

★第46回手の先天異常懇話会

第46回手の先天異常懇話会を第50回日本手の外科学会学術集會会期中に開催いたします。問題症例などを持ち寄っていただき自由に討論する会ですので、多くの方々の参加をお待ちしております。本年度は外国人招待者にも多数参加していただく予定です。会の進行を円滑に行うため呈示していただく症例の数と概要をあらかじめ把握しておく必要がありますので、前もって応募していただくようお願いいたします。発表された症例につきましては懇話会での症例検討の内容を含めた簡単なまとめ（原稿用紙2枚、図2～3枚）を後日提出していただき、日手会誌に掲載いたします。

会 期：平成19年4月20日(金) 12:55～13:55
 会 場：山形／山形国際ホテル（第50回日本手の外科学会学術集會会場）
 内 容：症例検討会
 会 費：1,000円 ※昼食を用意いたします
 応募方法：平成19年3月末日までに郵送またはE-mailで症例の概要を写真とともに送りください。なお、症例数の関係で当日に検討できなかった症例につきましては、先天異常委員会で検討のうえ、後日報告させていただきます。
 郵 送 先：〒355-0072 埼玉県東松山市石橋1721
 埼玉成恵会病院・埼玉手の外科研究所 担当：福本 恵三
 E-mail：handsurg@seikei.or.jp
 世 話 人：日本手の外科学会先天異常委員会 委員長 福本 恵三

※当日はPCによるプレゼンテーションになります。各自PCを持参してください。プロジェクターとの接続には、一般的な15ピンのコネクター以外に対応不能ですので、必要に応じて変換ケーブルも持参してください。また、PCのトラブルに備えてプレゼンテーションをCD-ROMまたはUSBメモリーで持参してください。スライドによる発表は受け付けません。発表時間は5分です。発表者の方は必ず時間までに会場受付にお越しください。

★日本手の外科学会第13回春期教育研修会

会 期：平成19年4月21日(土) 8:30～15:30
 会 場：山形／山形国際ホテル（第50回日本手の外科学会学術集會会場）
 問合先：〒468-0063 名古屋市天白区音聞山1013 (有) ヒズ・ブレイン内
 日本手の外科学会事務局
 TEL: 052-836-3511 FAX: 052-836-3510 E-mail: info@jssh.gr.jp

★第19回日本ハンドセラピィ学会学術集會

会 期：平成19年4月21日(土) 8:50～16:30
 会 場：山形／山形国際ホテル2階 平成の間
 テーマ：手指伸筋腱損傷一皮下断裂を中心に一
 参加費：参加申し込みは当日会場で承ります。
 会員 3,000円, 非会員 5,000円, 学生 500円,
 医師 無料（抄録代は別途500円頂戴いたします）
 問合先：〒020-8505 盛岡市内丸19-1
 岩手医科大学附属病院 リハビリテーション室 中嶋 英一
 TEL: 019-651-5111（代表）内線2026

★第80回日本整形外科学会学術総会

会 期：平成19年5月24日(木)～27日(日)
 会 場：神戸市／ポートピアホテルほか
 会 長：中村孝志（京都大学整形外科）
 詳細は <http://www.joa2007.jp/>

★6th Triennial International Hand & Wrist Biomechanics Symposium

会 期：平成19年6月29日(金)～30日(土)
 会 場：National Cheng Kung University, Tainan, Taiwan
 会 長：Haw Yen Chiu, MD & Fong Chin Su, PhD
 詳細は <http://conf.ncku.edu.tw/tihwbs6/>

編集後記

日手会ニュースの内容も年々充実度を増し、会長の今回の学会にかける意気込みと、各委員長それぞれの委員会に真摯かつ精力的に取り組んでおられる様子が例年以上にひしひしと伝わってきます。また、今年から日本手の外科学会認定専門医制度がスタートし、すでに449名が専門医として認定され、250以上の施設が研修施設認定を申請されているようです。各委員会のメンバーおよび事務局の方々にとっては大変な作業で本当にご苦労様です。そしていよいよ50年の節目となる学術集會が目前に迫ってきました。主催校である山形大学と広報委員会の先生方は学会と関連行事の準備に追われて大変お忙しい毎日かと思いますが、記念すべき50回目の学会が成功裏に終了するよう、もう一踏ん張りご尽力頂くとともに、一人でも多くの会員が山形に集われることを期待しています。みんなの力で記念すべき第50回学術集會を成功させようではありませんか。（文責：香月憲一）

広報委員会

（担当理事：田中寿一 アドバイザー：藤澤幸三、堀内行雄、柳原 泰、委員長：青木光広、委員：池上博泰、香月憲一、砂川 融、副島 修、高原政利、戸部正博）